

## Ajitasenavyākaraṇa の成立に関する試論

平 林 二 郎

### はじめに

Ajitasenavyākaraṇa (『アジタセーナの授記』[Asv]) は、大声聞 Nandīmitra<sup>1</sup> が東方マガダ国の王 Ajitasena<sup>2</sup>を仏教に導き、両者ともに釈尊から授記を得るといふ大乘經典<sup>3</sup>である。

この經典は、2つの仏国土 (Sukhāvati [極楽] と Abhirati [妙喜世界]) への言及<sup>4</sup>、釈尊が Sukhāvati に行くといふ偈頌<sup>5</sup>、Ajitasena の息子が阿羅漢果を獲得して仏国土を見る記述<sup>6</sup>など、概して他の大乘經典には見られない内容が説かれていることで知られている。

Schopen [1977]は、Asv の釈尊が Sukhāvati に行くといふ偈頌に注目し、Sukhāvati と Amitābha (アミダ仏) の関わりは特別なものではなく、Sukhāvati や Abhirati<sup>7</sup>といった仏国土は大乘仏教の「1つの基本的な理想の場所」として説かれていると論じている<sup>8</sup>。

Dutt [1984]・Williams [2009]は、Ajitasena の息子が出家した瞬間に阿羅漢果を獲得して仏国土を見る記述を例に挙げ、Asv には阿羅漢果を得るといふ初期仏教の思想と、仏国土といふ大乘仏教の思想が混在していると指摘し、Asv が初期仏教から大乘仏教に移り変わろうとする時代に作成された經典だと論じている<sup>9</sup>。

このような経緯から、Asv は早い時代に作成された大乘經典だと考えられているが、この經典にはチベット語訳・漢訳がなく、また、作成年代・作成地についての研究も行われておらず、その詳細については問題が残されているのが現状である<sup>10</sup>。

そこで本稿は、Asv の現存写本、登場人物、写本の記述に見られる差異に焦点を当て考察を行い、その成立に迫ることを目的としている。

## 1. Asv の写本

Asv については、ギルギット写本、サンクトペテルブルグ写本、および、大英図書館収蔵写本断簡が現存している。

まず、これら 3 写本の由来を紹介したい。

### 1.1. ギルギット写本 (Asv[GM])



(Asv[GM] folio 1 *recto*<sup>11</sup>)

**Asv(GM)**: Complete manuscript, 41 folios, 6 lines, Gilgit/Bamiyan type I, 6th–7th century C.E.

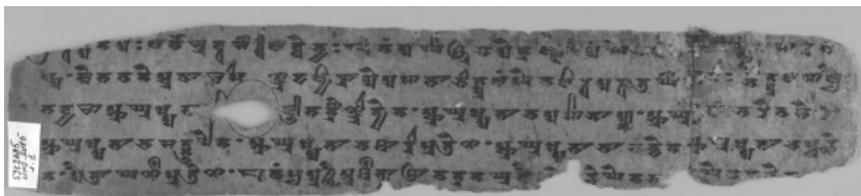
この写本は、1931年にパキスタンのギルギット近郊のストゥーパで発見されたものであり<sup>12</sup>、現在はインド国立公文書館に収蔵されている。

Asv の研究は、Dutt が Bhattacharya の協力のもと<sup>13</sup>この写本を底本としてテキストを出版したことにはじまる<sup>14</sup>。

Asv の現存写本のうち、完本はこのギルギット写本だけであり、他の写本のない<sup>15</sup>folio 28 *verso* 5 以降はこの写本のみで研究を進めることとなる。

Dutt は、Asv を含むギルギット諸写本が書写された年代を 5～6 世紀としている<sup>16</sup>。しかしながら、筆者はこの写本に使用されている書体 (Gilgit/Bamiyan type I) から、Asv のギルギット写本は 6～7 世紀に書写されたものではないかと推定している<sup>17</sup>。

## 1.2. サンクトペテルブルグ写本 (Asv[StP])



(StPSF vol. I, Plate 25, SI 2085 folio 1 verso)

**Asv(StP)**: Incomplete manuscript, 24 folios, 5 lines, South Turkestan Brahmi, 7th–9th? century C.E.

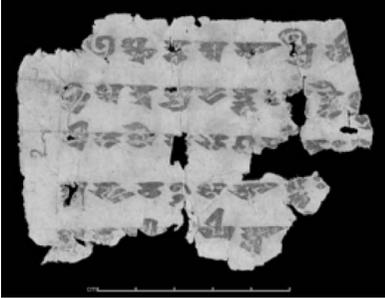
Asv(StP)は、1882年から1903年までカシュガルでロシア総領事を務めたペトロフスキー<sup>18</sup>によって収集されたものであり、現在はロシア科学アカデミー東洋写本研究所 (The Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences [= IOM RAS]) に収蔵されている。

この写本の正確な出土地は不明であるが、収集者がペトロフスキーであり、また、写本の書体が South Turkestan Brahmi であることから、コータン周辺で出土したものであると推定される。

書写年代については、コロフォン等、それを特定できるような記述はない。Asv(StP)の使用書体である South Turkestan Brahmi については研究が進んでおらず、他の書体の年代推定より精度に欠けるが、Sander [2005], Waugh [2010]などを参考にすれば7～9世紀初頭に書写された写本であろうと思われる。

この写本については、1990年と2015年に影印版が出版されている。前者は Bongard-Levin と Vorob'eva-Desjatovskaja によるものであり<sup>19</sup>、この研究成果では写本の影印版 (モノクロ) の掲載とともに、ローマナイズ、ロシア語訳がなされている。後者は *The St. Petersburg Sanskrit Fragments* (StPSF) vol. I である。この叢書では、近年撮影した写本の影印版 (カラー)、および、筆者、William B. Rassmussen, Safarali Shomakhmadov の3人で行った Asv(StP)・Asv(GM)のローマナイズと英訳を出版した<sup>20</sup>。

### 1.3. 大英図書館収蔵写本断簡

(IOL San 1202 *recto*<sup>21</sup>)(IOL San 701<sup>22</sup>(right) + 708<sup>23</sup>(left) *recto*)

**大英図書館収蔵写本断簡:** IOL San 701+708 (same folio), 1202 (=IOL SS 92/3), 5 lines, South Turkestan Brahmi, 7th–9th? century C.E.

これら3葉の写本断簡は、スタイン<sup>24</sup>が中央アジアからイギリスに持ち帰ったものであり、現在は大英図書館に収蔵されている。

IOL San 701, 1202 は、Wille [2005: pp. 64–65], [2014: p. 226]によって、Asv であるとの比定がなされた。また、IOL San 708 を比定したのは玉井達士博士(国際仏教学高等研究所)である。この比定当時、筆者らは Asv の論文を執筆中であり、玉井博士の連絡を受け、その内容を出版させていただいた<sup>25</sup>。

これらの写本断簡は Asv(GM) 34v4~35v3 に相当する。IOL San 701 と 708 は、写本(の切れ目)が一致し同一葉であるとわかる。また、IOL San 1202 も、書体、行数、パラレルによる前後関係が IOL San 701 と 708 と一致する。したがって、これら3葉の写本断簡は同一葉であろうと考えられる。

IOL San 701 *recto* には赤字で kha i.80 と番号が付されており、これらの写本断簡はコータン近郊のカダリク(Khadaliq)で出土したものだ<sup>26</sup>とわかる。

また、これらすべての写本断簡は South Turkestan Brahmi で書写されており、7~9世紀初頭に書写されたものと思われる<sup>27</sup>。

以上を踏まえ、これらの写本断簡と Asv(StP)を比較すると、両者はともにコータン近郊で出土したと推定され、書体、行数が一致していることから、同一の写本である可能性も考えられる<sup>28</sup>。

## 2. Asv の登場人物

Asv の主要登場人物である大声聞 Nandīmitra と Ajitasena 王については、限られた先行研究しかなく不明な点が多い。そこで Asv の成立に迫る手がかりの1つとして、それぞれの名前が見られる文献を整理し、両者の生存年代と活躍した地域について考察してみたい。

### 2.1. Nandīmitra について

Nandīmitra (dGa' ba'i bshes gnyen; 難提蜜多羅, 慶友) は「十八羅漢」の一人に数えられる人物であり<sup>29</sup>, Asv においては Śrāvastī (舎衛城) の Jetavana Vihāra (祇園精舎) におり, 釈尊によって東方マガダ国の王 Ajitasena のもとに派遣される大声聞として登場する<sup>30</sup>.

Asv 以外で Nandīmitra の名前が見られるのは *Nandimītrāvadāna* や Tāranātha (Kun dga' snying po) の『インド仏教史』など<sup>31</sup>の限られた文献だけである。

したがって, 本稿では *Nandimītrāvadāna* と Tāranātha の Nandīmitra に関する記述に焦点を当て, 生存年代と活躍した地域について考察してみたい。

#### 2.1.1. *Nandimītrāvadāna* について

*Nandimītrāvadāna* は原典が発見されておらず, 玄奘訳の『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』<sup>32</sup>と, チベット語訳の *Phags pa dGa' ba'i bshes gnyen gyi rtogs pa brjod pa*<sup>33</sup>のみが現存している。これらを扱った先行研究としては袴谷 [2007a]がある。この論文では, *Nandimītrāvadāna* の概説, 玄奘訳とチベット語訳の対照, および, チベット語訳の和訳がなされている。

Nandīmitra の生存年代と活躍した地域については, *Nandimītrāvadāna* の冒頭部分に記述が見られる。まず, その箇所を紹介したい。

『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』(大正蔵, 49 卷, No. 2030, 12c11-13)

如是傳聞。佛薄伽梵, 般涅槃後, 八百年中, 執師子國勝軍王都, 有阿羅漢名難提蜜多羅 唐言慶友。(下線筆者)

*Phags pa dGa' ba'i bshes gnyen gyi rtogs pa brjod pa* (袴谷 [2007a: pp. 47–48])  
bcom ldan 'das mya ngan las 'das nas lo brgyad brgya lon par gyur pa na / de'i  
 tshe de'i dus na yul Shi bi ka zhes bya ba na grong khyer Byin gyis brdabs<sup>(sic)</sup> pa  
 zhes bya ba yod de / de na rgyal po Rigs pa'i sde zhes bya ba gnas so // de'i tshe  
 rgyal po Rigs pa'i sde'i yul na dge slong dGa' ba'i bshes gnyen zhes bya ba  
 mam par thar pa brgyad la bsam gtan pa mngon par shes pa drug dang ldan pa /  
 (下線筆者)

和訳 (袴谷 [2007a: p. 64])

世尊が入滅なさってから (mya ngan las 'das, parinirvṛtya) 八〇〇年が過ぎ  
た, その折 (de'i tshe, tasmin samaye) その時に (de'i dus na, tasmin kāle) ,  
シビカ (Śibika) といわれる国にアディシュターナ (Byin gyis brlabs pa,  
Adhiṣṭhāna) といわれる王都 (grong khyer, nagara) があり, そこにユクテ  
イセーナ (Rigs pa'i sde, Yuktisena) といわれる王が住んでいた. その折,  
ユクティセーナ王の国に, ナンデイミトラ (dGa' ba'i bshes gnyen,  
Nandimitra, 難提蜜多羅) といわれる比丘にして, 八解脱 (mnam par thar  
pa, aṣṭau vimokṣaḥ) における静慮 (bsam gtan pa, dhyāna) なる六神通 (mngon  
par shes pa drug, ṣaḍ-abhijñā) を具え... (下線筆者)

玄奘訳に「佛薄伽梵, 般涅槃後, 八百年中」とあり, チベット語訳にも「世尊が入滅なさってから八〇〇年が過ぎ」とあることから, これらの記述によれば, Nandimitra は3～4世紀頃の人物であると考えられる<sup>34</sup>.

Nandimitra が活躍した国は, 玄奘訳では「執獅子国」, また, チベット語訳では「シビカ (Śibika)」となっている。

玄奘訳の「執獅子国」については Dutt が研究を行っている<sup>35</sup>. そのなかで Dutt は「執獅子国」をスリランカの Siṃhadvīpa と想定する説<sup>36</sup>など, 方々に「執獅子国」に相当するであろう国を挙げているが, Mahāvastu のなかでカリンガ国に Siṃhapura という都城がある点<sup>37</sup>, Kinnaṛ-jātaka などで Siṃhapura と Hastināpura を簡単に行き来している点<sup>38</sup>などから, マガダ国付近にあったと思われる Sīhala / Sīhapura が「執獅子国」ではないかとしている。

この他、Dutt は玄奘訳に見られる「勝軍」という王都の名前を還梵すれば Ajitasena となる可能性があり<sup>39</sup>、Nandimitra と Ajitasena という名前が関係付けられていたかもしれないと指摘している<sup>40</sup>。

チベット語訳の国名「シビカ (Śibika)」については、袴谷 [2007a: p. 75, 和訳註(3)]が「Śibika については、Monier, SED<sup>41</sup>, p. 1072 の当該項目を参照して頂きたいが仏典中のそのような国名は未詳」としている。

Śibika という名詞は Monier (MW) を見る限り Śibi 王や Śibi 族を指す<sup>42</sup>。しかしながら、このチベット語訳の Śibika が Śibi 族 (の国) を指しているとするれば、Śibi 族の国<sup>43</sup>に関する記述は『マハーバーラタ』(MBh) に散見される。

MBh において主に Śibi 族の国に関する記述が見られる箇所は3巻の248章から256章<sup>44</sup>である。これらの章は Sindhu と Sauvira の王である Jayadratha が Draupadī を掠奪しようとする場面である。この場面では、Jayadratha 王の従えている Koṭikāśya が「シビの王」<sup>45</sup>・「シビ族の長」<sup>46</sup>と呼ばれており、また、Śibi, Sindhu, Trigarta の連合軍がビーマ、アルジュナと戦っている<sup>47</sup>。ここに列挙されている Sindhu と Trigarta は北西インドにあった王国の名前であり、Śibi 族の国も同様に北西インドにあったのではないかと考えられる。

また MBh には、鳩を護るために自分の体を切り取り、その肉を鷹に与えた Śibi 族の国の Uśīnara 王の物語が記されている<sup>48</sup>。この物語と同様の話が、主人公は Śibi (尸毘) 王<sup>49</sup>となっているが、『大智度論』<sup>50</sup>や『賢愚経』<sup>51</sup>などにも説かれている<sup>52</sup>。

『法顕伝』にはガンダーラから南下したハスタ (宿呵多) 国の紹介として、尸毘王の物語の舞台がこの地であったと記述されている<sup>53</sup>。また、「宗雲行記」<sup>54</sup>にも、雀離浮図<sup>55</sup>から北西に7日進み、一大水を渡ったところが尸毗 (尸毘) 王の物語の地であると記述されている<sup>56</sup>。伝説的な物語ではあるが、これらの記述から、Śibi 族の王はガンダーラ近辺の北西インドで活躍していた可能性があるのではないかと考えられる。

以上、Śibika が Śibi 族の国を指しているのであれば、MBh などの記述から、その国は北西インドにあった可能性があると推測される。

### 2. 1. 2. Tāranātha の『インド仏教史』について

17 世紀初頭に Tāranātha によって著された『インド仏教史』に Nandimitra に関する記述がある。該当部分は以下である。

Tāranātha 『インド仏教史』 (Schieffner [1868: p. 49.4–21])

bsdu ba gsum pa byas pa'i 'og tu rgyal po ka niṣka yang 'das pa tsam na. (中略)  
 grong khyer pa ṭa li pu trar dgra bcom dus mi sbyor 'phags pa ashva gupta ces  
 bya ba byung ste. de ni mam par thar pa brgyad la bsam gtan pa'o. des chos  
 bstan pas 'phags pa dga' ba'i bshes gnyen la sogs dgra bcom pa yang ci rigs  
 byung zhing. bden pa mthong ba mang du byung ngo. (下線筆者)

和訳 (寺本 [1928: pp. 104–106])

第三結集を行ひしに次で、迦膩色迦王 (Kaniṣka) は崩御せり。 (中略)  
 波吒釐城 (Pāṭāliputra) に於いて、當時未だ阿羅漢位を得せざる聖阿濕縛  
 崛多 (Aśvagupta) なるもの出づ。彼は八解脱 (Thar-pa bRgyad) に就い  
 て三昧を修して説法せしによりて、聖難陀密多羅 (Nandamitra, dGaḥ-Baḥi  
 bSes-gÑen) 等の阿羅漢輩出し、眞諦を見得するもの多く現れたり。  
 (下線筆者)

上記によれば、Tāranātha の『インド仏教史』に登場する Nandimitra (Nandamitra)<sup>57</sup>は、Kaniṣka 王が亡くなった 2 世紀頃にマガダ国の Pāṭāliputra で活躍した人物だと考えられる<sup>58</sup>。

この他、*Nandimitrāvadāna* に「ナンディミトラといわれる比丘にして、八解脱における静慮なる六神通を具え…」とあり、Tāranātha の『インド仏教史』に「聖阿濕縛崛多なるもの出づ。彼は八解脱に就いて三昧を修して説法せしによりて、聖難陀密多羅等の阿羅漢輩出し…」とある。これらを見ると 17 世紀の Tāranātha は *Nandimitrāvadāna* の伝承を考慮して『インド仏教史』を記した可能性もある。

### 2. 1. 3. Nandimitra の生存年代と活躍した地域

Asv において、Nandimitra は Śrāvastī の Jetavana Vihāra からマガダ国に派遣

される大声聞として登場する。Asv 以外で Nandīmitra が登場する文献は限られている。

2. 1. 1. *Nandīmitrāvadāna* の玄奘訳、および、チベット語訳によれば、Nandīmitra の生存年代は釈尊が入滅した 800 年後（3～4 世紀頃）である。また、Nandīmitra が活躍した地域は玄奘訳によればマガダ国の近くの執獅子国である。一方、チベット語訳にある Śibika という国名については未詳である。しかしながら、Śibika が Śibi 族の国を指しているのであれば、MBh などの記述から、その国は北西インドにあった可能性があると推測される。

2. 1. 2. *Tāranātha* の『インド仏教史』によれば、Nandīmitra の生存年代はカニシカ王が亡くなった（2 世紀）頃であり、活躍した地域はマガダ国の Pāṭaliputra である。

以上をまとめれば、Nandīmitra の生存年代は 2～4 世紀頃の間になると考えられる。また、活躍した地域としてはマガダ国のあった東インドと関係が深い。この他、*Nandīmitrāvadāna* のチベット語訳に見られる Śibika が Śibi 族の国を指しているとするれば、Nandīmitra が北西インドで活躍した可能性もあると推測される。

## 2. 2. Ajitasena について

Asv において、Ajitasena は仏教に帰依し、釈尊から授記を得る東方マガダ国の王として登場する<sup>59</sup>。しかしながら、Law [1926: pp. 93–175] や、Smith [1957] など<sup>60</sup>を見る限り、古代インドのマガダ国に Ajitasena という名前の王は存在しなかった。したがって、Asv に登場する Ajitasena は架空の王であり、誰か他に仏教を信仰し、多くの事業を行った Ajitasena という名前の人物がいたのではないかと考えられる。

そこで、本稿では、初期仏教、および、大乘仏教に関係するもの<sup>61</sup>で Ajitasena 王の名前が見られる、筆者が調べた限りのすべての資料、*Mahāvastu*、Swāt 出土の銘文、ならびに、Ajitasena grhapati（無勝軍長者）の名前が見られる *Gaṇḍavyūha* から、Ajitasena の生存年代と活躍した地域を考察したい。

### 2.2.1. *Mahāvastu* について

*Mahāvastu* において Ajitasenarājan という名前が見られるのは「十地」の第九地部分である<sup>62</sup>。

この Ajitasenarājan という名前は Senart による校訂であり、写本<sup>63</sup>では Ajinasenaḥ rājā となっている。Senart は、写本によってはしばしば ta と na の文字が混同されていることや、また、Ajinasena という名前が他のサンスクリット仏典に見られないことなどから Ajinasenaḥ rājā を Ajitasenarājā と校訂したのではないかと考えられる<sup>64</sup>。

この箇所では、他の人物とともに Ajitasena (Ajinasena) の名前が列挙されているだけであり、具体的な生存年代や、活躍した地域は記されていない。

高原 [1955: pp. 512–513]によれば、*Mahāvastu* の「十地」部分の成立は華嚴系の「十地」に先行するものであり、紀元前後から1世紀末以前に成立したであろうと推定されている<sup>65</sup>。よって、Ajinasena を Ajitasena と校訂した Senart が正しければ、Ajitasena は *Mahāvastu* の「十地」部分が成立した1世紀末以前に生存していた人物ということとなる。

### 2.2.2. Swāt 出土の銘文について

Swāt で出土した Kharoṣṭhī 文字の銘文 (Swāt 3 [金薄板銘文, 平山郁夫蔵]) のなかに Ajitasena 王の名前が見られるものがある。この銘文を扱った先行研究としては Fussman [1986], ならびに、塚本 [1996]がある。以下でその内容を紹介したい。

Text (塚本 [1996: p. 1003])

- 1 rajasa Vijidasenasa Ku .. 'dhipatisa p[ut]re Ajidasena Oḍi-rajasa Navha-patisa saba=
- 2 budha puyaita / adida'ṅag[r]ata-pracupaṇa save praceg[r]asabudha puyaita / adida'ṅg[r]ata-pracupaṇa
- 3 save bhag[r]avato ṣavag[r]e puya[i]ta / madapida puyaita / save puya-h-araḥa puyaita / ime tasa=

- 4 gadasa bhagavado 'rahado samasabudhasa Śaka-muṇisa Śaka-virajasa  
vija-caraṇa-sa=  
5 paṇasa dhadue pratiṭhaveti apratiṭhavita-prubami paḍeśami Tirea mahathuba=  
6 mi dhakṣiṇami / ayam-edāṇi sabadukhovachedae saba(va)ḍu /  
7 Vaṣaye cauthaye 4 aṣāḍasa masa(sa) divasaye daśame 10 //

(下線筆者)

和訳 (塚本 [1996: p. 1005])

Ku .. 'adhipati (Ku .. の領主) Vijidasena (Jijitasena) 王の息子である Oḍi (Uḍḍiyāna) の王, Navha の主 Ajidasena (Ajitasena) によって, 一切諸仏は供養せしめられた。過去・未来・現在の一切の独覺は供養せしめられた。一切の応供は供養せしめられた。これらは如来・応供・正等覺・釈迦牟尼・釈迦族の中で苦を離れた者・明行を具足せる者の遺骨であって, 如来は, 仏教施設がかつて建立されたことがない地方の Tirā 所在の大塔中の南の場所に安住される。今やここに一切の苦の断絶〔すなわち〕涅槃に到達せんことを。第4年 Āṣāḍha 月の第10日に。(下線筆者)

この銘文で注目すべきは上記下線部の「Oḍi (Uḍḍiyāna) の王, Navha の主 Ajidasena (Ajitasena) 」と, 「第4年 Āṣāḍha 月の第10日に」という2箇所である。

「Oḍi (Uḍḍiyāna) の王, Navha の主 Ajidasena (Ajitasena) 」の Oḍi については, 塚本 [1996: p. 1003]において,

Oḍi, Bailey は Swāt (古名 Uḍḍiyāna) を推定する。Monier-Williams' *SED*. p. 191a: Udyāna; *BHSD* , p. 120a: Uḍḍiyāna = Oḍḍiyāna; 159a: Oḍḍiyāna/Oḍiyāna: PTS' *PED*, 155a: Uyyāna; 『法顯伝』(大正 51, 858a) の烏長国 (宋版, 烏菴国) の条に「仏法甚盛, 名衆僧止住処為僧伽藍, 皆小乗学。」と記す。

とある。この記述から, 現在のパキスタンの Swāt 溪谷付近に, Ajitasena という名前の王が存在していたとわかる。

また、「第4年 Āṣāḍha 月の第10日に」という記述については、Fussman [1986: pp. 10–11]が、他の王との年代関係から Ajitasena 第4年は24年 (A.D.) になると述べている。

以上から、この銘文の Ajitasena は仏教を信仰し、1世紀頃、Swāt 溪谷付近を治めていた王であったことがわかった。

### 2. 2. 3. Gaṇḍavyūha について

Gaṇḍavyūha において、Ajitasena は、善財(Sudhana)童子が歴参する55人の善知識の中の第49番目の人物として登場する<sup>66</sup>。以下が Ajitasena の登場箇所である。

Suzuki [1934–36, part IV: pp. 453.25–454.1]

atha khalu Sudhanaḥ śreṣṭhidāraḥ 'nupūrveṇa Rorukaṃ nagaraṃ gatvā  
yenĀjitaseno nāma gr̥hapatis tenopasaṃkramyĀjitasenasya gr̥hapateḥ pāḍau  
śirasābhivandya purataḥ prāñjaliḥ sthitvaivam āha || (下線筆者)

『大方廣佛華嚴經』(大正藏, 10卷, No. 279. 419b4–9)

善男子。於此南方。有城名出生。彼有長者。名無勝軍。汝詣彼問。菩薩云何學菩薩行。修菩薩道。是時善財禮妙月足。遶無數匝。戀仰辭去。漸向彼城。至長者所。禮足圍遶。合掌恭敬。於一面立。白言。  
(下線筆者)

和訳 (『国訳一切経：華嚴部 四』, p. 121.14–18)

善男子よ、此の南方に於いて城有り出生と名け、彼に長者有り無勝軍と名く。汝彼に詣りて問へ、菩薩は云何んが菩薩の行を學し、菩薩の道を修するやと。是の時に善財は妙月の足を禮して遶ること無數匝し、戀仰して辭し去り、漸く彼の城に向ひ、長者の所に至り、足を禮して圍遶し、合掌し恭敬して一面に於いて立ち、白して言はく。(下線筆者)

上記によれば、Ajitasena 長者は Roruka (出生) という都城に住している。BHSD の Roruka の項目(p. 457)には“**Roruka** (var. **Rauruka**); nt. (= Pali Roruka), (1) n. of a town, capital of the Sauvīras (Pali Sov°) ... 中略... (2) n. of city in the south

(and so apparently not the same as 1, which is in the northwest): Gv 453.18, 25.”とあり、(2)の“n. of city in the south”という解説は上記で挙げた *Gaṇḍavyūha* の該当箇所が典拠となっている。しかしながら、善財童子が南下して善知識を歴参するのは第 30 師（大天: Mahādeva）の墮羅鉢底 (Dvāravati<sup>67</sup>) までであり、それより南は海であるから、第 31 師以降は北インドに戻っている。したがって、*Gaṇḍavyūha* に登場する地名や位置は実際の地理と一致しているとは限らず<sup>68</sup>、BHSD の(1)と(2)の解説が同じ都城を指している可能性もある。

羽溪 [1971]は、Roruka という名前の都城が2つあったと指摘している。前者は上記 BHSD (1)の解説にあるように Sauvīra 国の主都、現在のグジャラート州のカッチ湾付近に Roruka があったとしている<sup>69</sup>。後者はコートン(于闐)の北方にあった曷勞落迦という都城であり、この「曷勞落迦」は Roruka を音写したものであると論じている。

羽溪は、コートンの北方に Roruka とよばれる都城があった根拠として、*Divyāvadāna* 第 37 章など<sup>70</sup>に見られる記述では地理的・気象状況的にカッチ湾付近の Roruka に適さないことを論じ、また、玄奘の記した『大唐西域記』に見られる曷勞落迦という都城についての記述<sup>71</sup>が、前述した *Divyāvadāna* の内容と共通する点が多いことを挙げている<sup>72</sup>。

この他、羽溪は、コートンの北方で起こった大暴風が、後代、仏教を軽んじて土砂に埋まった Roruka の記述として仏典に取り入れられ、また、仏教を信仰し栄えた Bimbisāra 王・マガダ国と関係付けられ、*Divyāvadāna* 第 37 章にみられる譬喩譚として伝承されたのではないかと論じている<sup>73</sup>。

上記を整理してみたい。Ajitasena 長者は第 49 番目の善知識であるから、*Gaṇḍavyūha* に説かれている Roruka を実際の地理に当てはめれば、Roruka は海のなかにあることになってしまう。羽溪 [1971]によれば、Roruka という都城はカッチ湾付近、もしくは、コートンの北方にあったと考えられる。

以上を踏まえると、*Gaṇḍavyūha* に登場する Ajitasena 長者が住している Roruka は、西インドのカッチ湾付近か、もしくは、コートンの北方にあったのではないかと推定される。

#### 2. 2. 4. Ajitasena の生存年代と活躍した地域

Asv に登場する東方マガダ国の王 Ajitasena は架空の人物であり、誰か他に仏教を信仰し、多くの事業を行った Ajitasena という名前の人物がいたのではないかと考えられる。

2. 2. 1. *Mahāvastu* においては、Ajitasenarājan (写本では Ajinasenaḥ rāja) という名前が「十地」の第九地部分に見られる。*Mahāvastu* の「十地」部分の作成年代は 1 世紀末以前と考えられていることから、Ajinasena を Ajitasena と校訂した Senart が正しければ、Ajitasena の生存年代は作成年代と同様に 1 世紀末以前になると考えられる。

2. 2. 2. *Swāt* 出土の銘文によれば、1 世紀頃、*Swāt* 溪谷付近を治め、仏教を信仰した Ajitasena という王がいたと考えられる。

2. 2. 3. *Gaṇḍavyūha* において、Ajitasena 長者は Roruka という都城に住していると記述されている。羽溪 [1971] を参考にすれば、この Roruka という都城は、西インドのカッチ湾付近、もしくは、コータンの北方にあったのではないかと推定される。

これらをまとめれば、Asv に登場する Ajitasena に帰せられる可能性のある人物は少なくとも 1 世紀末以前に存在していたと考えられる。また、Ajitasena が活躍した地域としては、*Swāt* 溪谷付近の北西インド、Roruka という都城のあったカッチ湾付近の西インド、もしくは、コータンの北方が候補地として挙げられる。

### 3. Asv の写本の記述に見られる差異

ここでは、Asv のギルギット写本 (Asv[GM]) とサンクトペテルブルグ写本 (Asv[StP]) の記述を比較し、両写本に見られる差異について考察してみた。

Asv はいわゆる Buddhist Hybrid Sanskrit (仏教混淆梵語) で書写されている。よって、しばしば古典サンスクリット文法にそぐわない文章を文意から判断して読み進めなければならない。

Asv については Asv(GM), Asv(StP), および、大英図書館収蔵写本断簡しか現存しておらず、厳密に写本の系統を別けることは難しい。しかしながら、筆者の私見では、これらの写本に大きな内容の差異は見られず、現存している写本はすべて同じ系統に属するものであろうと考えている。

Asv(GM)と Asv(StP)は同じ系統に属すと考えられる写本であるが、これらの写本を比較すると、使用されている語形などに差異が見られる。このような差異が見られる場合、Asv(StP)よりも Asv(GM)の方が文意や、文法に合った語形を使用していることが多い。以下に2つの例を挙げてみたい。

## 例 1

Asv(GM) 2v4–3r1<sup>74</sup>

yadā tvam̐ praviśasi piṇḍapātika vimocayeyam̐<sup>75</sup> bahavam̐ hi prāṇinām\*

試訳：乞食としてあなたが〔舎衛城に〕お入りになられたときに、実に、あなたは多くの有情を解脱させるでしょう。

Asv(StP) 2v5–3v1<sup>76</sup>

yadā tvayā praviśati piṇḍapā[t]iko vimocayeyam̐<sup>77</sup> (ba)havo hi p[r]ā[ṇ]ina

例 1 は、王舎城に乞食に行こうとしている釈尊に対して、アーナンダが話しかけている偈頌である。Asv(StP)の“tvayā praviśati”では釈尊ではなく、他の piṇḍapātika が主語になってしまい文意に合わない。したがって、Asv(StP)よりも Asv(GM)の方が文意に合った語形を使用している。

## 例 2

Asv(GM) 5v6<sup>78</sup>

atha bhagavām̐ pūrveṇa naga<ra>dvāreṇa cChrāvastīm̐ mahānagarīm̐ praviṣṭo  
(°)bhūt\*

試訳：そこで、世尊は東の門を通して大都舎衛城に入った。

Asv(StP) 5v1<sup>79</sup>

atha bhagavām̐ pūrveṇa nagaradvāreṇa Śrāvastyām̐ mahānagarām̐ praviṣṭo  
(°)bhūt\*

ここで、Asv(GM)は Śrāvastūḥ mahānagarīm と両単語ともに f. sg. acc. となっているが、Asv(StP)は Śrāvastyāḥ(f. sg. loc.), mahānagarāḥ(m./n. sg. acc.)となっており、性と格が一致していない。したがって、Asv(GM)は Asv(StP)よりも文法に合った語形を使用している。

**例1**は、Asv(GM)が Asv(StP)よりも文意に合った語形を使用している例である。**例2**は、Asv(GM)が Asv(StP)よりも文法に合った語形を使用している例である。

以上わずかではあるが<sup>80</sup>、Asv(StP)よりも Asv(GM)の方が文意や、文法に合った語形を使用している場合が多いことを示した。

## まとめ

本稿で述べた内容を再整理してみたい。

**1. Asv の写本**では、Asv の現存する3写本を紹介した。

- ・Asv(GM): ギルギット出土、完全な写本、6～7世紀。
- ・Asv(StP): コータン周辺出土、不完全な写本、7～9世紀頃。
- ・大英図書館収蔵写本断簡: カダリク出土、3葉、7～9世紀頃、Asv(StP)と同一写本の可能性有り。

**2. Asv の登場人物**では、Asv の主要登場人物である Nandīmitra と Ajitasena の生存年代と活躍した地域について考察を行った。

*Nandimītrāvadāna* (玄奘訳・チベット語訳) と *Tāranātha* の記述から推定すれば、Nandīmitra の生存年代は2～4世紀頃の間になると考えられる。また、Nandīmitra の活躍した地域は、*Nandimītrāvadāna* の玄奘訳と *Tāranātha* の記述によれば、マガダ国のあった東インドと関係が深いと考えられる。この他、*Nandimītrāvadāna* のチベット語訳に見られる Śibika が Śibi 族の国を指しているとするれば、Nandīmitra が北西インドで活躍した可能性もあると推測される。

Asv に登場する東方マガダ国の王 Ajitasena は架空の人物であり、誰か他に仏教を信仰し、多くの事業を行った Ajitasena という名前の人物がいたのではないかと考えられる。*Mahāvastu* に見られる Ajitasena (Ajinasena) 王は、

*Mahāvastu* の「十地」部分が成立したと推定される 1 世紀末以前の人物であると考えられる。Swāt 出土の銘文に見られる Ajitasena 王は 1 世紀頃に Swāt 渓谷付近を治め、仏教を信仰していた人物であった。*Gandavyūha* において Ajitasena 長者は Roruka という都城に住していると記述されている。この Roruka という都城は、西インドのカッチ湾付近、もしくは、コータンの北方にあったのではないかと推定される。これらをまとめれば、Asv に登場する Ajitasena に帰せられる可能性のある人物は少なくとも 1 世紀末以前に存在していたと考えられる。また、Ajitasena が活躍した地域としては、Swāt 渓谷付近の北西インド、Roruka という都城のあったカッチ湾付近の西インド、もしくは、コータンの北方が候補地として挙げられる。

3. **Asv の写本の内容**では、Asv(StP)よりも Asv(GM)の方が文意や、文法に合った語形を使用している場合が多いことを示した。

以上を踏まえ、Asv の成立について考察してみたい。

### Asv の主要登場人物から見る Asv の作成年代

Asv の主要登場人物は Nandīmitra と Ajitasena の二人である。Nandīmitra の生存年代は現存資料によれば 2～4 世紀頃の間であろうと考えられる。もう一人の主要登場人物である Ajitasena は架空の人物であるが、彼に帰せられる可能性のある人物は 1 世紀末以前に存在していたと考えられる。

以上を踏まえれば、Asv の主要登場人物 2 人の名前が出揃うのは早くともカニシカ王が亡くなった（2 世紀）頃であり、Asv の成立はそれより後の 2 世紀以降になるであろうと考えられる。

### Asv の主要登場人物が活躍した地域について

Nandīmitra が活躍していた可能性のある地域は東インド、もしくは、北西インドであろうと推測される。また、Ajitasena が活躍した可能性のある地域としては北西インド、西インド、もしくは、コータンの北方が候補地として挙げられる。以上から、主要登場人物 2 人が活躍した可能性のある地域は東インド、西インド、北西インド、もしくは、コータン北方となる。

## Asv の作成地について

筆者は、北西インドのガンダーラ文化圏、もしくは、コートンを含めた中央アジアにおいて Asv が作成された可能性が高いのではないかと推測している。その理由を以下に述べていきたい。

### ・Asv と東インド

Tāranātha の『インド仏教史』によれば、Nandimitra はマガダ国の Pāṭaliputra で活躍していたとの記述がある。しかしながら、Asv に登場する Ajitasena は実在したマガダ国王ではなかった。Divyāvadāna 第 37 章など、後代に作成された仏典のなかには、仏典が作成された地域とマガダ国などの仏教における重要な地域を関連付けて創作されたものがある<sup>81</sup>。

以上から考えれば、Asv は別の地域で活躍した Ajitasena とマガダ国を関連付けて創作された可能性があり、東インドで Asv が作成された可能性は低いのではないかと考えられる。

### ・Asv と西インド

Gaṇḍavyūha において Ajitasena 長者は Roruka という都城に住していると記述されている。この Roruka という都城は、西インドのカッチ湾付近、もしくは、コートンの北方にあったのではないかと推定される。しかしながら、この人物は Asv のように王として登場するのではなく、長者 (grhapatī) として登場している。また、もう一人の主要登場人物である Nandimitra と西インドについては、関わりを見出すことができなかった。

以上、主要登場人物の一人とは関係しているが、その関わりは弱く、写本も発見されていないことから、西インドで Asv が作成された可能性は低いのではないかと考えられる。

### ・Asv とガンダーラ文化圏

Swāt で出土した銘文から北西インドに Ajitasena という仏教を信仰した王が実在していたことを確認できる。また、Nandimitrāvadāna のチベット語訳

に見られる Śibika が Śibi 族の国を指しているとするれば、Nandīmitra が北西インドで活躍した可能性もあると推測される。この他、Asv の現存写本は北西インドに近いカシミールのギルギット、および、カシミールと密接な関係にあったコータンでしか発見されていない<sup>82</sup>。

以上、Asv の主要登場人物が活躍した地域と現存写本の出土地から、Asv は北西インドのガンダーラ文化圏で作成された可能性があるのではないかと考えられる。

また、北西インドで Asv が作成されたのであれば、Asv は何らかの Prakrit で作成され、ギルギットではそれがサンスクリットに修正され、中央アジアのコータンなどでは修正されないまま（あるいは、誤りの多いサンスクリットに変えられて）伝承されたのではないかと考えられる。

#### ・Asv と中央アジア

*Gaṇḍavyūha* において Ajitasena 長者は Roruka という都城に住していると記述されている。この Roruka という都城は、西インドのカッチ湾付近、もしくは、コータンの北方にあったのではないかと推定される。サンスクリット仏典で Ajitasena という名前が見られるのは *Gaṇḍavyūha*, Asv, *Mahāvastu* の3つの文献だけであり、*Gaṇḍavyūha* の原型が成立したのはインドかもしれないが、*Gaṇḍavyūha* を含む形で『華嚴経』として編纂が行われたのはコータンであると考えられている<sup>83</sup>。また、Asv がコータンなどの中央アジアで作成されたのであれば、別の国の人物である Ajitasena をマガダ国と関連付けて王として登場させていても不思議ではない<sup>84</sup>。同様に、中央アジアにおいて、有名な大声聞である Nandīmitra と Ajitasena が関係付けられたのかもしれない。

この他、Asv の写本はコータン、および、コータンと密接な関係にあったカシミールのギルギットでしか発見されていない。

以上から、Asv がコータンを含む中央アジアで作成された可能性は否定できないと考えられる。

また、中央アジアで Asv が作成されたのであれば、Asv のオリジナルはコータン語などで作成されていた可能性が高く、中央アジアで作成された誤り

の多いサンスクリットテキストがギルギットに伝播して（または、伝播する過程で）文意や、文法に合うものになったと考えられる。

## Asv の作成年代と作成地

Asv の主要登場人物から考察すれば、Asv が作成された年代は早くともカニシカ王の亡くなった2世紀頃以降であると考えられる。よって、Asv は大乘経典の中でも早い時代に作成された経典であるとは言い難い。

また、Asv が作成された地域は、北西インドのガンダーラ文化圏、もしくは、コータンを含めた中央アジアではないかと筆者は推測している。しかしながら、未詳である部分や、推定のみで考察を進めている部分もあり、今後さらに詳細に研究を進めることで、Asv の成立を解明していきたいと考えている。

---

## 註

<sup>1</sup> Nandīmitra の名前については、Nandimitra, Nandamitra などの異読 (Dutt [1984: pp. 103–136]を参照) が見られる。しかしながら、Asv(GM)・Asv(StP)では Nandīmitra と書写されることが最も多い。よって、本稿では名前を Nandīmitra に統一した。(Asv[StP]では一度だけ Nandimitra と書写されている箇所[14r1]がある。また、Nandamitra という名前は Asv の現存サンスクリット写本には見られない。)

<sup>2</sup> Asv の本文中に以下のような記述がある (Hirabayashi [2015: p. 105]: Asv[GM] 17r2–4).  
 kālaṃ (13v6) kṛtvā pūrvasyān diśi Magadhaviṣaye rājā Ajitaseno nāma tasya rājño (14r1) Ajitasenasya antahpurasaḥsram asti •

<sup>3</sup> Asv のコロフォン (Hirabayashi [2015: p. 132]: Asv[GM] 40v4–5) には、  
 (40v4) || Ajitasenavyākaraṇanirdeśaṃ (40v5) nāma mahāyānasūtraṃ samāptam\* ||  
 とあり大乘経典として書写されたことがわかる。

<sup>4</sup> Sukhāvati と Abhirati の両方に言及している箇所は以下である。  
 (Hirabayashi [2015: pp. 95–96]: Asv[GM] 6r3–6.)

(6r3) atha bhagavāṃ praviṣṭamātreṇa Śrāvastyāṃ mahānagaryā navānavatiko(6r4)ṛi-  
 niyutaśatasaha○srāṇi satvānāṃ Sukhāvatyāṃ lokadhātau prati(6r5)ṣṭhāpita •  
 caturaśītisatvakoṇiṇiyutaśatasahasraṇy Abhiratyā lo(6r6)(kadhāt)au-r-Akṣobhyasya tathāgatasya  
 buddhakṣetre pratiṣṭhāpitā -r- ...

<sup>5</sup> 「釈尊が Sukhāvati に行く」という記述は、Śrāvastī (舎衛城) に住む老人が釈尊を讃嘆する偈頌の部分と、Nandīmitra が Ajitasena とともに釈尊に会いに行こうとする際に述べた偈頌の部分に見られる。

老人の偈 (Hirabayashi [2015: pp. 95–96]: Asv[GM] 4v3–5v4.)  
 (4v3) atha sa jīṃkapuruṣa taṃ janakāyaṃ bhagavata guṇavaṃnam udīra(4v4)ṇatayā gāthābhir

adhyabhāṣata : || (中略) (5v2) Sukhāvatiṃ gacchati buddhakṣetraṃ paryamkabaddho sada bodhisatvo brahma(5v3)svaro susvaru maṃjuḥṣa ○ bhavanti varṣāna sahasrakotiḥbhiḥ apā(5v4)yaḡāmī na kadāci bheṣya○te :

Nandimitra の傷 (Hirabayashi [2015: pp. 95–96]: Asv[GM] 29r2–v1.)

(29r2) atha Nandimitraṃ mahāśrāvakaṃ(sic) (29r3) rājānaṃ Ajitasena<ṃ> gāthābhir adhyabhāṣata : || (中略) • sudurlabhaṃ darśanu nāyakasya na cire(29r6)[ṇa] so gacchati buddhakṣetraṃ • Amitāyusasya varabuddhakṣetre Sukhāvatiṃ gaccha(29v1) ..[t]. + .. tat\*

<sup>6</sup> Hirabayashi [2015: p. 127]: Asv(GM) 33v4–6 を参照.

(33v4) athāyusmān Ānandena taṃ rāja(33v5)kumāraṃ prabrajāpitaḥ saha prabrajitamātreṇa arhatphalaṃ prāptam abhūt\* (33v6) sarvabuddhakṣetrāṇi paśyati sma •

<sup>7</sup> Acharya [2010: p. 65]は、Asv のなかで世尊が Śrāvastī を訪れた際に、Sukhāvati には 99 百千コーティニユタの衆生が安立せしめられたのに対し、Abhirati には 84 百千コーティニユタの衆生であったことから、その数をもとに、アミダ仏を信仰する勢力がアシュク仏を信仰する勢力をまだ完全に包圍 (圧倒) してはいないが、その過程の段階に Asv が作成されたのではないかと推測している。(テキストについては註 4 を参照)

<sup>8</sup> Schopen [1977: pp. 179–182]を参照.

<sup>9</sup> Dutt [1984: pp. 73–74]; Williams [2009: pp. 27–28]. また、Dutt は Asv の成立時期に注目し、Asv を “semi-Mahāyānic form of Buddhism” と評している (Dutt [1984: p. 73]). 一方、Williams は Asv を初期仏教と大乘仏教の発展の標識と考え、Asv を “proto-Mahāyāna” と呼んでいる (Williams [2009: pp. 27]).

<sup>10</sup> Dutt [1984: p. 74]は、Asv のなかで頭巾(head-dress)が使用されていることから、この経典はカシミールのような寒い国で成立しただろうと推定している。しかしながら、Dutt が頭巾と訳した cakrika は乞食者の杖(khakkarika-もしくは khakkaraka-)のことであり、この説は誤りである (von Hinüber [1992: pp. 9f., 35f.]を参照)。この他、Nakamura [1987: p. 234]は「Asv はカシミールで成立したようである」と述べているが、その根拠については述べられていない。

<sup>11</sup> Vira [1974] folio 2336 を参照。写本の写真については国際仏教学高等研究所所蔵のマイクロフィルム (Lokesh Chandra 博士寄贈) を使用させていただいた。ご協力をいただいた辛嶋静志所長、工藤順之教授にここでお礼を申し上げます。

<sup>12</sup> Dutt [1984: p. i–ii]を参照.

<sup>13</sup> Dutt [1984: p. ii]を参照.

<sup>14</sup> Dutt [1984]の 1st edition は 1939 年に出版されている (1st Edition は未入手)。この他、Asv(GM) の影印版は Vira [1974]によって出版されている。

<sup>15</sup> Asv(GM)34v4–35v3 については、大英図書館収蔵の写本断簡にパラレルが発見されている。その詳細は 1.3. 大英図書館写本断簡で紹介する。

<sup>16</sup> Dutt [1984: p. ii]は以下のように述べている。

The mss. (=Gilgit manuscripts) were written in the 5th or 6th century A.C.<sup>(sic)</sup> and as such they are some of the earliest so far discovered in India, ...

<sup>17</sup> Schopen [1977: p. 202 ll. 1–3]などを参照.

<sup>18</sup> Nikolai Fyodorovich Petrovski (1837–1908): スヴェン・ヘディン (Sven Anders Hedin, 1865–1952) やオーレル・スタイン (Marc Aurel Stein, 1862–1943) の探検隊にも協力し、そのコレクションにはサカ語、サンスクリット語、トカラ語の文献などがあることで知られる。(IDP の HP を参照。URL: [http://idp.bl.uk/pages/collections\\_ru.a4d](http://idp.bl.uk/pages/collections_ru.a4d))

- <sup>19</sup> Bongard-Levin [1990: pp. 157–184], facsimile edition [*Ibid.*: pp. 372–394]. 出版の際のタイトルは、*Ajitasenavyākaraṇa* ではなく、*Avadāna o gaṇḍī* (*: Avadāna on gaṇḍī*)となっている。その理由としては写本を予備整理した Sergey Oldenburg の覚書から、そのタイトルをつけたとある (Karashima [2015: pp. ix–x])。また、von Hinüber [1992: p. 9]に、榎本文雄氏がこの写本を *Ajitasenavyākaraṇa* だと比定したとある。
- <sup>20</sup> Hirabayashi [2015]. この研究成果は辛嶋静志氏 (国際仏教学高等研究所所長)、玉井達士博士 (国際仏教学高等研究所研究員)、長島潤道氏 (大正大学専任講師)、呉娟氏 (ライデン大学)、および、その他の Brāhmī Club の参加者の協力のもと出版したものである。
- <sup>21</sup> IDP: IOL San 1202 を参照。以下がその URL である。  
[http://idp.bl.uk/database/oo\\_scroll\\_h.a4d?uid=303278118;recnum=68257;index=1](http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=303278118;recnum=68257;index=1)  
 また、写本整理番号の IOL San は India Office Library Sanskrit を略したものである。
- <sup>22</sup> IDP: IOL San 701.  
[http://idp.bl.uk/database/oo\\_scroll\\_h.a4d?uid=1136836978;recnum=27610;index=1](http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=1136836978;recnum=27610;index=1)
- <sup>23</sup> IDP: IOL San 708.  
[http://idp.bl.uk/database/oo\\_scroll\\_h.a4d?uid=1135932379;recnum=27617;index=1](http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=1135932379;recnum=27617;index=1)
- <sup>24</sup> Marc Aurel Stein (1862–1943): イギリスの探検家であり、コータン近郊のニヤ遺跡の調査や、「敦煌文書」をイギリスに持ち帰ったことで知られる。  
 Hirabayashi [2015: p. 85]では、これらの写本がヘルンレ・コレクションに含まれるものであるとしたが、スタイン・コレクションの間違いであったことを訂正したい。
- <sup>25</sup> Hirabayashi [2015: p. 85, および, pp. 128–129]を参照。
- <sup>26</sup> 堀 [2013: p. 190]を参照。また、IOL San 708 *recto* にも赤字で書かれている部分があるが滲んでしまっている。
- <sup>27</sup> 1. 2. Asv[StP]と同様に Sander [2005], Waugh [2010]などを参考に年代を推定した。
- <sup>28</sup> Wille [2005: pp. 64–65]は IOL San 1202 と Asv(StP)が同じ写本である可能性について言及している。
- <sup>29</sup> 中村 [2001: p. 777] じゅうはちらかん【十八羅漢】の項目には「①十六羅漢に慶友尊者と賓頭盧とを加えたもの」とある。また、名前については註 1 を参照。
- <sup>30</sup> Hirabayashi [2015: pp. 105–109]を参照。
- <sup>31</sup> Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor が著した仏教史書である *dPag-bsam-ljon-bzang* にも *dga' ba'i bshes gnyen* (Nandimitra) の名前が見られることが知られている。寺本 [1928: p. 405]を参照。
- <sup>32</sup> 『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』(大正藏, 49 卷, No. 2030, pp. 12c–14c)
- <sup>33</sup> *Phags pa dGa' ba'i bshes gnyen gyi rtogs pa brjod pa* (Derge 4146, Su, 240a4–244b1: Peking 5647, U, 299b6–305b)
- <sup>34</sup> 釈尊の生没年については複数の説がある (中村 [1992: pp. 107–117])。玄奘訳や、チベット語訳が行われた頃としては、以下の 2 つの説のどちらかが有力であったと考えられる。初期仏教の伝説によれば釈尊の入滅は紀元前 544 年である。また、「衆聖点記」説によれば入滅は紀元前 486 年である。したがって、Nandimitra の生存年代は 3～4 世紀となる。
- <sup>35</sup> Dutt [1984: pp. 77–80]で‘Sihapura or Simhadvīpa, capital of Ajitasena’という章を立て考察を行っている。
- <sup>36</sup> Dutt [1984: p. 77]を参照。
- <sup>37</sup> Senart [1882–97, vol. iii: p. 432.14]を参照。
- <sup>38</sup> Senart [1882–97, vol. ii: pp. 94–115]を参照。

<sup>39</sup> Dutt [1984: p. 77]は「勝軍」を還梵すれば Jayasena, もしくは, Ajitasena となる可能性があるとは指摘している。また, Ajita を厳密に還梵すれば無能 (勝) となることも述べている。

<sup>40</sup> Dutt [1984: pp. 77]を参照。

<sup>41</sup> 本稿では MW という略号を使用している。

<sup>42</sup> MW の Śibika の項目 (p. 1072) には“Śibika, m. N. of a king (= *śibi*), Buddh.; pl. N. of a people in the south of India, VarBṛS.”とあり, Śibika はシビ王の名前 (尸毘迦), もしくは, Śibi 族を指している。

『ブリハット・サンヒター』(VarBṛS) ではインドの南部にシビカがいると記述されているが(矢野 [1995: p. 86.3]を参照), MBh においては北西インドにいないのではないかと筆者は考えている。

<sup>43</sup> MBh には“rājyaṃ Śibīnām” (3.131.20a) といった記述が見られ Śibi 族の国があったことを示している。また後で述べるが, 上村 [2002: p. 363]は Uśīnara 王をシビ国の王と説明している。

<sup>44</sup> MBh vol. 4 pp. 869–895, および, 上村 [2002b: pp. 252–276]を参照。

<sup>45</sup> MBh vol. 4 p. 875, および, 上村 [2002b: p. 256.14]を参照。

<sup>46</sup> MBh vol. 4 p. 873, および, 上村 [2002b: p. 255.6]を参照。

<sup>47</sup> この箇所は原文では以下のようになっている。

Śibi-Sindhu-Trigartānām viśādaś cāpy ajāyata /  
tān dṛṣṭvā puruṣavyāghrān vyāghrān iva balotkaṭān // 3.255.3

(MBh vol. 4 p. 888, および, 上村 [2002b: p. 268.15]を参照)

<sup>48</sup> MBh vol.3 pp. 426–430, および, 上村 [2002a: pp. 364–367]を参照。

<sup>49</sup> MBh において, Śibi (尸毘) 王は Uśīnara の息子として登場している。MBh 5.88.19 に以下のような表現がある。

“Śibir auśīnaro dhīmān uvāca madhurāṃ giram.” (MBh vol. 6 p. 355)

「聡明なるウシーナラの息子シビは, 甘美な言葉を述べた」(上村 [2002c: p. 348])

また, Uśīnara の息子である Śibi 王という人物については紀元前 6 世紀に祭祀学者によって知られていた可能性がある (松濤 [2006: p. 255])。

<sup>50</sup> 大正蔵, 25 卷, 87c–88c.

<sup>51</sup> 大正蔵, 4 卷, 351c–352b.

<sup>52</sup> 町田 [1980]は, この尸毘王の物語が『仏本行経』, 『十住毘婆沙論』, 『六度集経』などの仏典に見出せるとしている。

<sup>53</sup> 長沢 [1971: p. 37]を参照。

<sup>54</sup> 「宗雲行記」は北魏の楊衒之の著作『洛陽伽藍記』巻五に付されたものであり, 北魏の官人の宗雲と僧侶恵生が西域で經典を探し求めた際の旅行記として知られる。

<sup>55</sup> 雀離浮図はパキスタンのペシャワール市にある仏塔である。詳細については定方 [1980]を参照。

<sup>56</sup> 長沢 [1971: p. 210]を参照。

<sup>57</sup> 註 1 を参照。

<sup>58</sup> 註 31 で挙げた *dPag-bsam-ljon-bzang* においても, この記述と似た箇所がある。寺本 [1928: p. 405]を参照。

<sup>59</sup> 註 2 を参照。

<sup>60</sup> この他, Raychaudhuri [1923: pp. 97–121], 中村 [1997: pp. 358–367]を参照したが, マガダ国に Ajitasena という王の名前は見られなかった。

<sup>61</sup> 密教では 8 世紀頃に『大威力烏樞瑟摩明王』(大正蔵, 21 卷, No. 1227) などの經典を訳出した北天竺出身の Ajitasena (阿質達戩, 無能勝將) という人物がいる。また, ジャイナ教では 10

世紀に活躍した Ajitasena という人物がいる (Krishnamachariar [1937: p. 752]を参照)。しかしながら、彼らは Asv(GM)が書写された年代よりも後代の人物であり、Asv の Ajitasena とは無関係であると考えられる。

<sup>62</sup> Senart [1882–97, vol. i: p. 140.11]を参照。

<sup>63</sup> Ajitasenarājan-BHSD p. 7 を参照。また、本論文を執筆するにあたり *Mahāvastu* の Sa 写本 (Staatsbibliothek zu Berlin / Preußischer Kulturbesitz, Berlin : No. PSB2), Sb 写本 (Staatsbibliothek zu Berlin / Preußischer Kulturbesitz, Berlin : No. PSB30), B 写本 (Bibliothèque Nationale, Paris : No.87-88-89), C 写本 (University of Cambridge : Add.1339) を確認したところ、Ajinasenaḥ | rājā (Sa, Sb) もしくは Ajinasenaḥ rājā (B, C) となっていた。

<sup>64</sup> Senart は写本の Ajinasenaḥ rājā を Ajitasenarājā と校訂しているが、その根拠は示されていない。

<sup>65</sup> この他、越路 [1958: p. 410]には「十地經の成立は初期般若直後と思われるが、特に十地に關しては兜沙經に注目する必要がある。A.D., 二世紀 (178–189) には十地思想があつた事が知られるが...」とある。

<sup>66</sup> Asv の Ajitasena は王であるが、*Gaṇḍavyūha* では grhapati (居士, 長者) となっている。Suzuki [1934–36, part IV: pp. 453.25–454.13].

<sup>67</sup> Suzuki [1934–36, part I and II: p. 218.6 ff.]を参照。

<sup>68</sup> 彦坂 [1993: p. 998]を参照。

<sup>69</sup> 羽溪 [1971: pp. 673–674]を参照。この他、Roruka について扱っている論文としては Lüders [1940: p. 652], Konow [1934]がある。これらの論文では Roruka の位置を現在の Aror ではないかとしている。

<sup>70</sup> Cowell [1886: pp.544–586]を参照。また、羽溪 [1971: p. 669]によれば、これと同様の譬喩譚が『根本説一切有部毘奈耶』45–46 卷、西藏本の甘珠爾律部にも掲載されていると紹介している。

<sup>71</sup> 『大唐西域記』(大正蔵, 51 卷, No. 2087, 945b09–b27) を参照。

<sup>72</sup> 羽溪 [1971: pp. 673–676]を参照。

<sup>73</sup> 羽溪 [1971: pp. 676–677]を参照。

<sup>74</sup> Hirabayashi [2015: p. 91]を参照。

<sup>75</sup> Asv では、-eyam という語形が 2nd. sg. Opt. で使用されている。この語形は BHSG には記載されていない。Cf. Rasmussen [1995: pp.86–87].

<sup>76</sup> Hirabayashi [2015: pp. 90–91]を参照。

<sup>77</sup> 註 75 を参照。

<sup>78</sup> Hirabayashi [2015: p. 95]を参照。

<sup>79</sup> 同上。

<sup>80</sup> Asv(GM), および、Asv(StP)の全ローマナイズを Hirabayashi [2015]に記載している。本稿の例文以外については、当該論文を参照。

<sup>81</sup> 羽溪 [1971: pp. 676–677]を参照。

<sup>82</sup> 金岡 [1975: pp. 128–130]によれば、コータンに仏教を伝えたといわれる毘盧折那という阿羅漢はカシミールから来たとい承されている。

<sup>83</sup> 木村 [1984]を参照。

<sup>84</sup> 羽溪 [1971: pp. 676–677]を参照。

## 参考文献, および, 略号

## ヴァインテルニッツ

- 1978 『仏教文献—インド文献史 第3巻—』, 中野義照訳, 日本印度学会.
- 金岡照光  
1975 「タクラマカンを越えて」, 監修・編集 中村元/笠原一男/金岡秀友, 『アジア  
仏教史 中国編 V シルクロードの宗教』, 佼成出版社, pp. 95-150.
- 上村勝彦  
2002a 『原典訳マハーバーラタ 3』, 筑摩書房.  
2002b 『原典訳マハーバーラタ 4』, 筑摩書房.  
2002c 『原典訳マハーバーラタ 5』, 筑摩書房.
- 木村清孝  
1984 「華嚴經典の成立」, 『東洋学術研究』, 23-1(106).
- 越路照徳  
1958 「菩薩十地思想成立の史的考察」, 『印度学仏教学研究』, 6(2), pp. 409-401.
- 定方晟  
1980 「雀離浮図の名について」, 『印度学仏教学研究』, 29(1), pp. 31-36.
- 佐藤直実  
2013 「阿闍仏とその仏国土」, 『仏と浄土—大乘仏典II』 (シリーズ大乘仏教5), 春秋社, pp. 179-207.
- 高原信一  
1955 「マハーワ` スト「大事」に於ける十地の構成の一考察」, 『印度学仏教学研究』, 3(2), pp. 512-513.
- 塚本啓祥  
1996 『インド仏教碑銘の研究 I—TEXT, NOTE, 和訳—』, 平楽寺書店.
- 寺本婉雅  
1928 『ターラナータ° 印度佛教史』, 丙午出版社.
- 長沢和俊  
1971 『法顕伝・宗雲行記』, 東洋文庫194, 平凡社.
- 中村元  
1992 『ゴータマ・ブツダ I 原始仏教 I』, 中村元選集 [決定版] 11, 春秋社.  
1997 『インド史』, 中村元選集 [決定版] 5, 春秋社.  
2001 『広説佛教大辞典』, 東京書籍.
- 袴谷憲昭  
2007a 「Nandimitrāvadānaの両訳対照本とチベット訳和訳」, 『駒澤短期大学研究紀要』, 35, pp. 43-86.  
2007b 「羅漢信仰の思想背景—『法住記』私釈—(序)」, 『駒澤大学仏教学研究紀要』,

- 65, pp. 1–17.
- 羽溪了諦  
1971 「西域に於いて創作された譬喩譚」, 『仏教論説選集』, 大東出版社, pp. 667–679.
- 彦坂周  
1993 「華嚴經入法界品と南インドの地名について」, 『印度学仏教学研究』, 41(2), pp. 999–997.
- 堀伸一郎  
2013 「華嚴經原典への歴史—サンスクリット写本断片研究の意義」, 『智慧／世界／ことば—大乘仏典 I』シリーズ大乘仏教 第4巻, 春秋社, pp. 185–211.
- 町田順文  
1980 「シビジャータカについて」, 『印度学仏教学研究』, 28(2), pp. 636–637.
- 松濤誠達  
2006 「インド文学よりみた大智度論の説話内容—尸毘王説話の背景としての施与の思想—」, 壬生台舜編, 『龍樹教学の研究』, 大蔵出版, 1983, pp. 245–281. 再掲, 『古代インドの宗教とシンボリズム』, 大正大学出版会, pp. 253–285.
- 矢野道雄, 杉谷瑞枝  
1995 『占術大集成 I』, 東洋文庫589, 平凡社.
- 山崎元一, 小西正捷  
2007 『南アジア史 I—先史・古代—』, 山川出版社.
- 山田龍城  
1959 『梵語佛典の諸文献—大乘佛教成立序説 資料篇—』, 平楽寺書店.
- 芳岡良音  
1959 「阿閼佛の浄土の起源」, 『印度学仏教学研究』, 7(2), pp. 555–556.  
1962 「阿閼佛と阿彌陀佛」, 『印度学仏教学研究』, 10(2), pp. 599–602.
- Acharya, Diwakar  
2010 “Evidence for Mahāyāna Buddhism and Sukhāvati Cult in India in the Middle Period: Early Fifth to Late Sixth Century Nepalese Inscriptions,” *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 31, 1/2, 23–75.
- Apte, Vaman Shivaram  
1986 *The Practical Sanskrit English Dictionary*, Revised and Enlarged Edition, Poona 1957, Reprint: Kyoto 1986.
- Asv = *Ajitasenavyākaraṇa*
- Bapat, P. V.  
1957 “Change of Sex in Buddhist Literature,” *Felicitation Volume Presented to S. K. Belvalkar*, Banaras, 209–215.

- BHSD = Franklin Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, New Haven 1953.  
 BHSG = Franklin Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*, New Haven 1953.  
 Bongard-Levin, G. M. and M. I. Vorob'eva-Desjatovskaja  
 1990 *Pamjatniki indijskoj pis'mennosti iz Central'noj Azii*, Vypusk 2, Moskva. Pamjatniki pis'mennosti vostoka LXXIII, 2 = Bibliotheca Buddhica XXXIV.
- Cohen, Richard S.  
 1995 "Discontented Categories: Hīnayāna and Mahāyāna in Indian Buddhist History," *Journal of the American Academy of Religion* LXIII/1, 1–25.
- Cowell, Edward Byles and R. A. Neil  
 1886 *The Divyāvadāna: A Collection of Early Buddhist Legends*, The University Press, Cambridge.
- Dutt, Nalinaksha, D. M. Bhattacharya, and Vidyavaridhi Pt Shivnath Sharma, Sastri D. O. C.  
 1984 *Gilgit Manuscripts*, vol. I, 2nd edition, Bibliotheca Indo-Buddhica 14, Delhi 1984.
- Fussman, Gérard  
 1986 "Documents épigraphiques kouchans (IV). Ajitasena, père de Senavarma", *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*, Tome 75, 1–14.
- GM = *Ajitasenavyākaraṇa* Gilgit Manuscript. Cf. Vira [1974] folio 2336–2416.
- Helffer, Mireille  
 1983 "Le Gandi: Un simandre tibétain d'origine indienne," *Yearbook for Traditional Music* 15, 112–125.
- von Hinüber, Oskar  
 1980 "Die Kolophone der Gilgit-Handschriften," *Studien zur Indologie und Iranistik*, Heft 5/6, 49–82.  
 1992 *Sprachentwicklung und Kulturgeschichte, Ein Beitrag zur materiellen Kultur des buddhistischen Klosterlebens*, Mainz, *Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften und der Literatur*.  
 2001 *Das ältere Mittelindisch im Überblick*, 2., erweiterte Auflage, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften (SbÖAW Bd. 467 = Veröffentlichung der Kommission für Sprachen und Kulturen Südasiens, Heft 20).
- Hu-von Hinüber, Haiyan  
 1991 "Das Anschlagen der Gaṇḍī in buddhistischen Klöstern," *Ji Xianlin Jiaoshou Bashi Huadan Jinian Lunwenji* 季羨林教授八十华诞纪念论文集 [Papers in Honour of Prof. Dr. Ji Xianlin on the Occasion of His 80th Birthday], ed. by Li Zheng & Jiang Zhongxin, II, Jiangxi Renmin Chubanshe 江西人民出版社, Nanchang 南昌, 737–768.
- Hirabayashi, Jiro (平林二郎), Willaim B. Rasmussen and Safarali Shomakhmadov  
 2015 "The Ajitasenavyākaraṇa from Central Asia and Gilgit", *The St. Petersburg*

*Sanskrit Fragments: Buddhist Manuscripts from Central Asia*, Vol. I, The Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences and The International Research Institute for Advanced Buddhology, Tokyo, 85–143.

IDP = International Dunhuang Project, URL: <http://idp.bl.uk>

Jones, J. J.

1949 *The Mahāvastu*, The Pali Text Society, London.

Konow, Sten

1934 “Roruka and Chinese Turkestan”, *Acta Orientalia*, Vol. XII, 136–141.

Krishnamachariar, M.

1937 *History of Classical Sanskrit Literature*, Tirumala-Tirupati Devasthanams Press, Madras.

Kurumiya, Yenshu

1978 *Ratnaketuparivarta: Sanskrit Text*, Heirakuji Shoten, Kyoto.

Lama, Chimpa and Alaka Chattopadhyaya(Tr.)

1990 *Taranatha's History of Buddhism in India*, ed. by Debiprasad Chattopadhyaya, Simla 1970, Reprint: Motilal Banarsidass, Delhi 1990.

Law, Bimala Churn

1926 *Ancient Indian Tribes*, Motilal Banarsidas, Lahore.

Lüders, Heinrich

1940 “Weitere Beiträge zur Geschichte und Geographie von Ostturkestan”, *Sitzungsberichte der Preußischen Akademie der Wissenschaften*, 1930, pp. 7–64. (reprint: H. Lüders, *Philologica Indica, Ausgewählte kleine Schriften, Festgabe zum 70. Geburtstage*, Göttingen 1940, 595–658).

m.c. = metri causa

MBh = Mahābhārata (*Mahābhārata*, ed. Vishnu S. Sukthankar and Shripad K. Belvalkar et al., Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1933–1972).

MW = Monier-Williams, M., *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford 1899.

Nakamura, Hajime

1989 *Indian Buddhism: A Survey with Bibliographical Notes*, Japan 1980. First Indian Edition Delhi 1987, Reprint: Motilal Banarsidass, Delhi 1989.

Rasmussen, William B.

1995 *An Annotated Transcription and Translation of the Gilgit Manuscript of the Ajitasenavyākaraṇanirdeśamahāyānasūtra*, unpublished M. A. thesis, The University of Texas, Austin.

Raychaudhuri, Hemchandra

1923 *Political History of Ancient India*, University of Calcutta, Calcutta.

Sander, Lore

- 2005 “Remarks on the Formal Brāhmī Script from the Southern Silk Route”, *Bulletin of the Asia Institute: Iranian and Zoroastrian Studies in Honor of Profs Oktor Skjærvø*, vol. 19, 133–144.
- Schiefner, Anton
- 1868 *Tāranāthae de doctrinae Buddhicae in India propagatione narratio : contextum Tibeticum e codicibus Petropolitanis*, Petropoli: Academia scientiarum Petropolitanae, St. Petersburg.
- 1869 *Tāranātha's Geschichte des Buddhismus in Indien*, Commissionäre der Kaiserlichenakademie der wissenschaften, St. Petersburg.
- Schopen, Gregory
- 1977 “Sukhāvai as a Generalized Religious Goal in Sanskrit Mahāyāna Sūtra Literature,” *Indo-Iranian Journal* 19, 177–210.
- 2005 *Figments and Fragments of Mahāyāna Buddhism in India: More Collected Papers*, The University of Hawai'i Press, Honolulu.
- 1989 “The Manuscript of the Vajracchedikā Found at Gilgit: An Annotated Transcription and Translation”, *Studies in the Literature of the Great Vehicle: Three Mahāyāna Buddhist Texts*, Michigan Series in Buddhist Literature No.1, ed. Gomez, L. O. and Silk, J. A., Ann Arbor, 89–139.
- s.e. = scribal error
- StPSF = *The St. Petersburg Sanskrit Fragments: Buddhist Manuscripts from Central Asia*, editors-in-chief, Seishi Karashima and Margarita I. Vorobyova-Desyatovskaya, Vol. I, The Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences and The International Research Institute for Advanced Buddhology, Tokyo, 2015.
- Senart, Émile
- 1882–97 *Le Mahāvastu*, vol. i–iii, Paris. Tokyo<sup>2</sup>, Meicho-Fukyū-Kai, 1977.
- Smith, R. Morton
- 1957 “On the Ancient Chronology of India (II)”, *Journal of the American Oriental Society* 77, 266–280.
- StP = *Ajitasenavyākaraṇa* St. Petersburg Manuscript, IOS SI 2085.
- Suzuki, Teitaro Daisetz and Hōkei Idzumi
- 1934–36 *Gaṇḍavyūha*, part I–IV, Kyoto: The Sanskrit Buddhist Texts Publishing Society; New rev. ed. Kyoto 1949: The Society for the Publication of Sacred Books of the World.
- Vandor, Ivan
- 1975 “The Gandi: a Musical Instrument of Buddhist India Recently Identified in a Tibetan Monastery,” *The World of Music* 17, 24–27.
- Vira, Raghu and Lokesh Chandra
- 1974 *Gilgit Buddhist Manuscripts (Facsimile Edition)*, Śata-Piṭaka Series Volume 9, International Academy of Indian Culture, New Delhi.

---

Waugh, Daniel C. and Ursula Sims-Williams

2010 “The Old Curiosity Shop in Khotan”, *Silk Road Journal* 8, 69–96.

Wille, Klaus

2005 “Some recently identified Sanskrit fragments from the Stein and Hoernle collections in the British Library, London(1),” *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* VIII, 47–79.

2014 “Survey of the Identified Sanskrit Manuscripts in the Hoernle, Stein, and Skrine Collections of the British Library (London)” in: *From Birch Bark to Digital Data: Recent Advances in Buddhist Manuscript Research, Papers Presented at the Conference Indic Buddhist Manuscripts: The State of the Field, Stanford, June 15–19 2009*, Eds. by Paul Harrison and Jens-Uwe Hartmann, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch–Historische Klasse, Denkschriften, Band 460, Wien;pp. 223–246.

Williams, Paul

2009 *Mahāyāna Buddhism: The Doctrinal Foundations*, 2nd Edition, Routledge, London and New York.

(大正大学総合佛教研究所 研究員)